1. 絵を描く時間

漢字の呼び水

動物園に遠足に行った、その次の日の“絵を描く”時間です。黒板には、「遠足」次に「動物園」と書かれてあります。

「いろんな動物がいましたね。何か一番面白かった？」

「僕、象さん。」

「そう。象さんね。」

先生は、そう答えながら、「動物園」の次に「象」と書きました。

「象さんのどんなところが面白かった？」

「長い鼻で、食べ物を掴んで食べてたところ。」

「そう、長い鼻でね。」

そう言いながら、続いて「長い鼻」と書きました。こうして、先生は、昨日の遠足の経験を、子供たちに尋ねては、それを思い出させ、そのうち、絵になりそうなものを、漢字で書付けていったのです。こうして黒板には、「猿」「白熊」など、いろいろな動物の名前が書き並べられました。

こうした話合いの後に、絵を描き始めたのです。子供たちは、初めて見る漢字でも、この話合いの中で、ほとんど覚えてしまいます。関心を持って見るものは、子供たちには覚えずにはいられないのです。

しかも、覚えてしまった漢字は、逆に、昨日の経験を呼び起す“信号”になり、これが子供たちの描く“遠足”の絵を豊かな、生き生きとしたものに導くのです。

この指導をなさった先生は、どなたもおっしゃっています。「漢字で指導するようになって、子供たちの描く内容が豊かになりました。今まで子供たちがなかなか描けないでいる時、呼び水のつもりで黒板に私が絵を描いて見せますと、子供たちはただその模倣をしたものですが、“漢字の呼び水”は決して模倣にならず（模倣しようとしても、摸倣のしようがありません）それぞれに個性ある絵を描いてくれます」と。

コラム　諺

雨だれ石を穿つ

雨だれがしたたり落ちる下にある石には、くぼみがある。それは一しずくの水滴が堅い石に穴を空けたもの。僅かなことでも同じことを長い間継続し反復するといつかは大きな仕事を成し遂げるものだ、ということ。